

アブラ、ミズキ、リョウブ、それにアスナロ、サワラ、ヒメコマツ等も少量混じっている。樹下にはニワトコ、オオカメノキ、ムラサキシキブ、タラノキ、ツルツゲ、イヌツゲ、アカミノイヌツゲ、ツルシキミ、キイチゴ、ミヤマモミジイチゴ、ハスノハイチゴ、マルバノキ、オオヤマレンゲ等の灌木や、シシガシラ、シノブカグマ、ミヤママイタチシダ、オシダ、ヤマソテツ、バイカオウレン、ツルアリドウシ等の草本が見られる。エゾユズリハは以上の如き植生の中に $5\sim15\text{ m}^2$ の範囲で6ヶ所の群落をかぞえ(付知又にて)、 100 m^2 以上に亘つて或は密に或は疎に群生(上大沢にて)している。樹高は1m内外であつた。

林弥栄氏はエゾユズリハの西南限は恐らく山口県佐渡郡の滑山であろうと言われ、同山には裏日本側を主産地とする種々の種類が中国山脈に沿うて西下して来ているとの事である。阿寺国有林内の2産地は滑山よりも北に位置してはいるが、信州として見れば北部地区と木曾南部とでは現在フローラの溝がある訳である。即ち北信地区は明かに裏日本系のフローラに入るが、木曾谷南部は表日本系フローラに属し而も暖地性の種類を少なからず有する。周防滑山は裏日本系の種類と暖地性の種類とが混在する点で阿寺国有林と異なると思う。木曾谷の南部は年降水量 $2400\sim2650\text{ mm}$ あり、大桑村野尻の辺は曇い所であるが、1946年頃に2日程で約1mの積雪を見たことを記憶する。付知又附近の積雪量は12月下旬に約30cm、1月下旬に約1m、2月に約1.5m、3月中旬に約1m、下旬に約60cmといふ報告(1949~1953)を得たが、2月~3月上旬が最大量であり1.5mと云う可成りな量である。之に対し木曾川本流沿いでは日陰で10cm位(1~2月頃)であるから冬の降水量に大差があることが分る。換言すれば阿寺国有林内のエゾユズリハ産地は局部的に裏日本の気候を呈すると言ひ得るであろう。故に其のエゾユズリハは矢張り其の本来の生育環境(深雪)らしい場所に生育を続けていると云う事迄は言つて良いと思う。尙木曾谷に於けるユズリハの北限は木曾川沿いの大桑村、殿であり、エゾユズリハの産地を距ること東へ約10km、緯度の上では南に僅々数百米距るのみである。然し上記の如く冬の降水量は全く違い、表日本型である。

本文を記すに当り、資源科学研究所の水島正美氏の御援助を戴いた。ここに厚く感謝の意を表します。

(長野県西筑摩郡山口村、村立山口中学校)

正 誤 Errata (Vol. 29 No. 5, p. 149, line 3)

正 (read)

Takeuchii

誤 (for)

Takauchii